

広島県立歴史博物館

# 研究紀要

第24号



今中丹後「御中老格控」からみる広島藩重職の書状贈答料紙	石川良枝	1
闘茶について—闘茶札と文献資料から探るその具体像—	石橋健太郎	24
資料紹介—塩竈神社奉納額について—	伊藤大輔	51
「菅茶山」の姓名・号について—茶山・晋師・太中—	岡野将士	59
吉川興経の引退と毛利元春の家督相続	木村信幸	67
研究ノート 文化年間初頭に地方に伝わった北方図について～「松前えそ図」と 「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」を事例に～	久下実	85
「山陽先生詩稿」訳注(一)	花本哲志	99
広島県立歴史博物館所蔵の雲華上人の書簡—翻刻と解題— ..... 湯谷祐三 廣森美枝子		121
<hr/>		
福山市津之郷町出土の廃和光寺塔址出土遺物について	尾崎光伸	(1)

**BULLETIN**  
**Of**  
**the HIROSHIMA PREFECTURAL MUSEUM of HISTORY**

**Vol.24**

**2021**

Artifacts Excavated from the Ruins of the Abandoned Wako-ji Temple Pagoda in  
Tsunogo-cho, Fukuyama City ..... OZAKI Mitsunobu (1)

---

Mapping papers used in formal correspondence, traced from Onchūrōkaku-hikae .....	ISHIKAWA Yoshie	1
“Toucha” —Search of the concrete image to begin with a tea competition cards— .....	ISHIBASHI Kentarou	24
About “SIOGAMA shrine exvoto” .....	ITOU Daisuke	51
About the name of “KAN Chazan” and pen name—Chazan Tokinori and Tachu— .....	OKONO Masashi	59
About the inheritance of Kikkawa family by “MOURI Motoharu” and the retirement of “KIKKAWA Okitsune” .....	KIMURA Nobuyuki	67
Two maps of HOKKAIDO spread to local area in Japan in early BUNKA-period (approximately 1804–1808) .....	KUGE Minoru	85
Sanyou-Sensei-Si-Kou;translation and annotation;part1 .....	HANAMOTO Satoshi	99
The letters of Priest Unge in the collection of the Hiroshima Prefectural Museum of History .....	YUTANI Yuuzou, HIROMORI Mieko	121

# 福山市津之郷町出土の廃和光寺塔址 出土遺物について

尾崎 光伸

廃和光寺塔址出土遺物は、昭和9・10年に行われた発掘調査で出土した遺物で、一部は広島県重要文化財（以下「県重文」と略す。）に指定されている。発掘調査が行われた場所は、福山市津之郷町の田辺寺の門前で、中心礎石1点とともに、瓦や金属製の相輪の一部、風鐸等が出土したようであるが、明確な遺構は知られていない。これらの出土遺物は、写真や一部の瓦の拓本が公開されているものの、実測図等は公開されていないためか、これまであまり取り上げられることがなかった。

しかし、この度、県重文に指定されている遺物が当館の企画展示へ出品されることが計画され、それに伴い遺物を精査する機会を得られ、所有者の御厚意により図化と写真撮影を行うことができた。本稿では、これらの遺物を紹介するとともに、廃和光寺に関してこれまでわかっている情報を整理し、出土遺物から窺える当該地域の歴史について考察してみたい。

本稿をなすにあたり、所有者である宗教法人田辺寺と寄託先である福山市立福山城博物館には調査に御快諾いただき、いろいろと便宜を図っていただいた。また、遺物については、東広島市教育委員会（当時）の妹尾周三氏から御教示いただいた。記して謝意を表したい。

## 1 廃和光寺の位置と歴史的環境

### （1）原始～古代の遺跡について

廃和光寺<sup>(1)</sup>は広島県福山市津之郷町大字津之郷に所在する。この地域は、芦田川の河口付近の西側に当たる。西から芦田川に流れ込む瀬戸川の両側には平野が広がっており、廃和光寺はこの平野部の北側の丘陵裾部に位置している。ちなみに、草戸千軒町遺跡からは西に約3kmの位置である。

この平野を望む丘陵上には、弥生時代から古墳時代の遺跡や中世の城館遺跡が数多く確認されている。また、近年では、平野部においても発掘調査例が増えつつあり、考古学的な検討が少しずつ進んでいる。

この地域に人々が住み始めたのは縄文時代と考えられ、サコ田遺跡<sup>(2)</sup>、赤羽遺跡<sup>(3)</sup>、本谷遺跡<sup>(4)</sup>等から縄文土器の小片が出土している。遺物量が増え始めるのは弥生時代からで、湯伝遺跡<sup>(5)</sup>からは弥生時代前期から中期、坂部第6号古墳の斜面下<sup>(6)</sup>からは中期の土器が出土しており、本格的に人々が住み始めるのはこの頃と考えられる。また、本谷遺跡<sup>(7)</sup>からは貨泉が出土しており、福山市重要文化財に指定されている。ただ、縄文～弥生時代中期頃までの遺跡については遺構が確認されておらず、詳細は不明である。明確な遺構が確認できるのは、弥生時代後期以降で、サコ田遺跡、赤羽遺跡、沢田遺跡<sup>(8)</sup>で、弥生時代後期から終末期にかけての集落が確認されている。

古墳時代には、北側の丘陵に数多くの古墳が造られる。現在確認されているものでは、沢田古墳群（2基〔横穴式石室〕）、赤羽古墳（粘土槨）、坂部古墳群（8基〔横穴式石室6・不明2〕）、本谷古墳群（6基〔横穴式石室〕）、加屋古墳群（3基〔横穴式石室〕）、サコ田古墳（横穴式石室）、内水越古墳群（6基〔箱

式石棺4・粘土槨？1・横穴式石室1)), スベリ石古墳群(5基〔横穴式石室3, 箱式石棺1, 不明1]), イコーカ山古墳, 池下山古墳群(4基〔箱式石棺])がある。このうち, イコーカ山古墳は, 前方後円墳の可能性が指摘されているが, それ以外はすべて小規模な円墳か墳丘の形が不明なものである。主体部は, 箱式石棺, 粘土槨及び横穴式石室で, 前二者は古墳時代前期から中期, 後者は古墳時代後期から終末期の古墳と考えられる。

古墳時代終末期以降の遺跡は, 沢田第1・2号古墳<sup>(9)</sup>, 坂部第3号古墳<sup>(10)</sup>がある。坂部第3号古墳は円墳で, 横穴式石室から7世紀前半の須恵器・土師器のほか, 鉄鏃・鉄釘等が出土している。沢田第1・2号古墳は墳形は不明だが, 横穴式石室内から8世紀代の須恵器等が出土し, 沢田第2号古墳の東3.5mの位置からも8世紀代の蔵骨器が出土している。なお, 沢田第1号古墳の斜面下からは陶棺や把手付き中空円面硯等が出土しており, 沢田第1号古墳の初葬時の遺物と推定されている。陶棺は備中・美作地域で数



第1図 廃和光寺位置図 (1:25,000)

- |                  |            |           |             |            |
|------------------|------------|-----------|-------------|------------|
| 1 廃和光寺           | 2 ザブ遺跡     | 3 本谷弥生遺跡  | 4 合戸1号遺跡    | 5 小山遺跡     |
| 6 沢田遺跡・沢田第1・2号古墳 | 7 吉成寺遺跡    | 8 大歳神社横遺跡 | 9 赤羽遺跡・赤羽古墳 |            |
| 10 坂部遺跡          | 11 坂部古墳群   | 12 串山城跡   | 13 本谷古墳群    | 14 加屋古墳群   |
| 15 サコ田遺跡・サコ田古墳   | 16 加屋遺跡    | 17 内水越遺跡  | 18 内水越古墳群   |            |
| 19 スベリ石古墳群       | 20 イコーカ山古墳 | 21 池下遺跡   | 22 池下山古墳群   | 23 巖島神社裏古墳 |
| 24 津ノ尾古墳群        | 25 地頭分溝淵遺跡 | 26 別所城跡   | 27 片山城跡     | 28 的場山城跡   |
| 29 小森館跡          | 30 神島城跡    | 31 湯伝遺跡   |             |            |

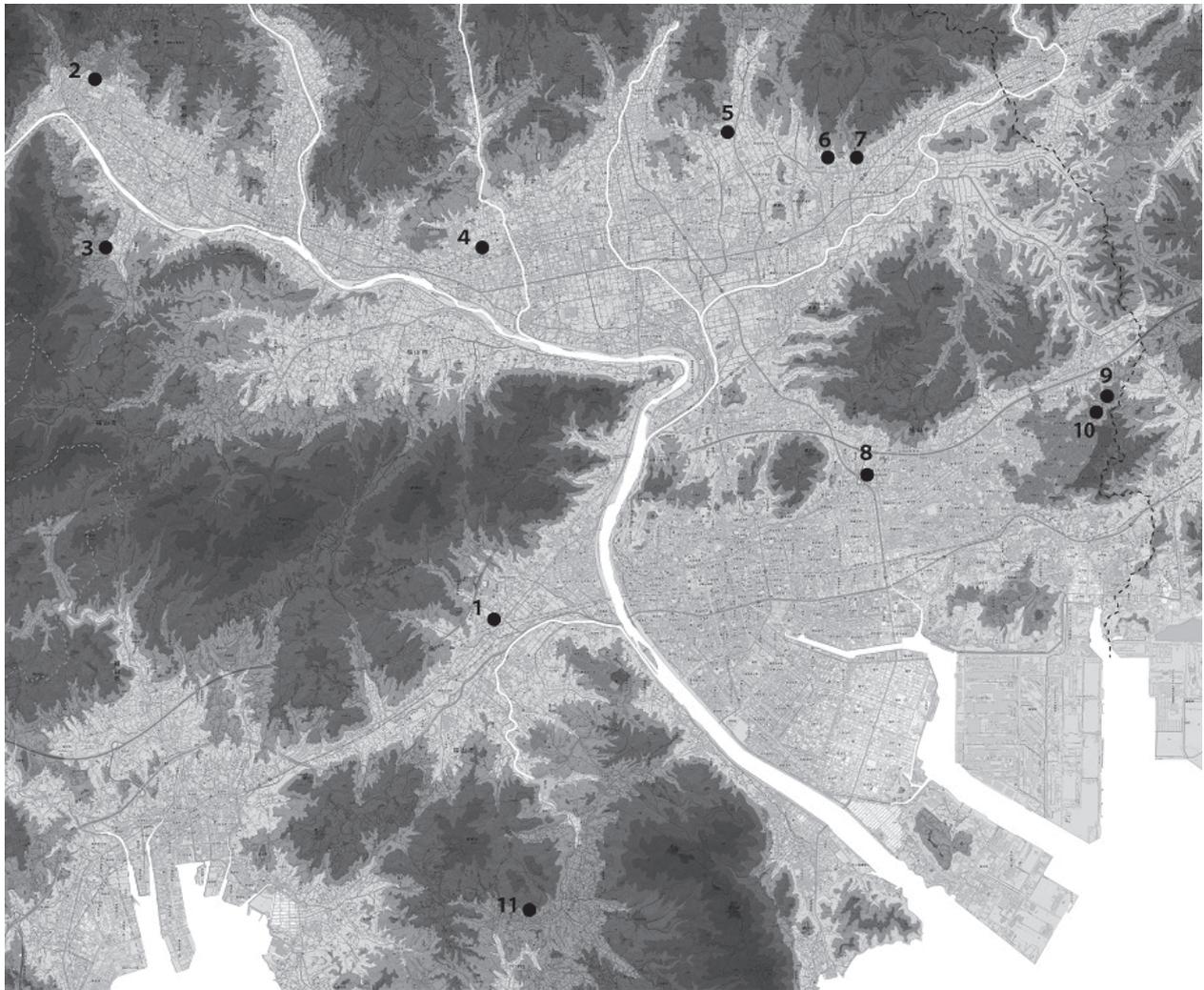
多く出土するが、広島県内では本例が 2 例目<sup>(11)</sup>、備後地域では初例である。

平野部の遺跡については、湯伝遺跡、ザブ遺跡<sup>(12)</sup>がある。湯伝遺跡では、弥生時代から古代にかけての遺物が多数出土しており、古代の掘立柱建物跡が検出されている。また、廃和光寺の南約 700m に位置するザブ遺跡からは 10 世紀後半の緑釉陶器とともに多数の土師器質土器が出土しており、寺跡と関連する施設があった可能性が指摘されている。

## (2) 芦田川流域の古代の寺院跡、瓦窯跡等について

次に、備後南部地域の奈良～平安時代の寺院跡と、平安時代の瓦の出土地、瓦窯跡についても見ておきたい。

備後南部地域のうち、芦田川の中・下流域には多くの古代寺院跡があることが知られている<sup>(13)</sup>。詳細な検討が加えられている遺跡は限られているが、中谷廃寺跡は天武朝初期（670 年代前半）に比定される瓦が



第 2 図 関係寺院跡、瓦窯跡位置図

- |                |          |         |           |        |
|----------------|----------|---------|-----------|--------|
| 1 廃和光寺跡        | 2 伝吉田寺跡  | 3 栗柄廃寺  | 4 廃最明寺跡   | 5 中谷廃寺 |
| 6 小山池廃寺        | 7 備後国分寺跡 | 8 宮の前廃寺 | 9 坪生滑池窯跡群 |        |
| 10 鎌山遺跡（江戸野遺跡） | 11 草田窯跡群 |         |           |        |

第1表 廃和光寺塔址出土遺物 注記等一覧表

図版	番号	種別	名称	注記	ラベル (縦×横)	記載内容
第4図	1	金属製品	九輪	×	2.3×1.5cm	福山 田辺寺
第4図	2	金属製品	九輪	×	なし	
第5図	3	金属製品	九輪	×	2.3×1.5cm	福山 田辺寺
第5図	4	金属製品	九輪	×	なし	
第5図	5	金属製品	九輪か？	×	なし	
第5図	6	金属製品	九輪か？	×	5.2×4.7cm	津之郷田辺寺前 五重塔の遺品 昭和九年八月一日 藤江尋常高等小学校
第5図	7	金属製品	九輪か？	×	5.2×4.7cm	津之郷田辺寺前 五重塔の遺品 昭和九年八月一日 藤江尋常高等小学校
第5図	8	金属製品	九輪か？	×	なし	
第5図	9	金属製品	九輪か？	×	なし	
第5図	10	金属製品	九輪か？	×	なし	
第6図	11	金属製品	風鐸	×	なし	
第6図	12	金属製品	風鐸	×	なし	
第6図	13	金属製品	風鐸	×	2.3×1.5cm	福山 田辺寺
第6図	14	金属製品	不明	×	5.2×4.7cm	津之郷田辺寺前 五重塔の遺品 昭和九年八月一日 藤江尋常高等小学校
第6図	15	金属製品	不明	×	なし	
第6図	16	金属製品	不明	×	2.3×1.5cm	福山 田辺寺
第6図	17	金属製品	不明	×	5.2×4.7cm	津之郷田辺寺前 五重塔の遺品 昭和九年八月一日 藤江尋常高等小学校
第7図	18	瓦	軒丸瓦	×	1.5×3.2cm	71 和光寺 田辺寺
第7図	19	瓦	軒丸瓦	×	1.5×3.2cm	71 和光寺 田辺寺
第8図	20	瓦	軒丸瓦	×	1.5×3.2cm	71 和光寺 田辺寺
第9図	21	瓦	軒平瓦	×	1.5×3.2cm	71 和光寺 田辺寺
第10図	22	瓦	軒平瓦	○	なし	5F03RT002
第10図	23	瓦	軒平瓦	○	なし	S9.8.1出土（松小） 5F03RT001
第11図	24	瓦	軒平瓦	×	1.5×3.2cm	71 和光寺 田辺寺
第12図	25	瓦	軒平瓦	×	1.5×3.2cm	71 和光寺 田辺寺

出土している<sup>(14)</sup>。また、この地域には藤原宮式軒瓦が出土する寺院跡があることが知られており、伝吉田寺跡、栗柄廃寺跡、小山池廃寺跡、宮の前廃寺跡は7世紀終末から8世紀前葉に伽藍の造営や整備が行われたとされる<sup>(15)</sup>。

こうした寺院跡から出土した瓦の中には、その後の改修等に伴い平安時代に補充されたと見られるものもあるが、現在は詳細な研究がなされておらず、詳細は不明である。ただ、奈良県の興福寺からは、備後国分寺跡や小山池廃寺から出土した瓦と同范の軒瓦が出土しており、興福寺の康平3年（1060）の大火後の再建瓦と考えられている。これらは、福山市坪生町の鎌山遺跡（鎌山窯跡）から出土したものに同范例がある。また、天徳4年（960）の内裏消失に伴う再建瓦の中にも、備後国分寺跡や小山池廃寺から出土した瓦と同范のものが含まれており、こうした瓦は造寺国制によって各地から運ばれたもので、この時期に備後国に瓦窯があったこと、また、その窯が国衙の管理下にあったことを示す<sup>(16)</sup>とされている。

平安時代の瓦窯跡<sup>(17)</sup>については、坪生滑池第1・2号窯跡がある。また、廃和光寺が所在する沼隈郡内の瓦窯跡については、草田窯跡群が知られている。このうち、草田第3・4号窯跡から瓦と須恵器が出土しているという記述があるが、詳細は不明である。

## 2 発掘調査の概要とその後の経緯

廃和光寺塔址出土遺物は、現在の田辺寺の門前で出土した遺物である。廃和光寺については、同時代史料で見ることにはできないが、寺伝によれば、養老 5 年（721）開基と伝えられ、大同 2 年（807）には唐から帰国した空海が当地に立ち寄り、塔を建立したとされる。

さて、発掘調査の概要については、管見の限りでは、昭和 37 年（1962）に広島県文化財保護審議会委員であった村上正名氏が報告したもの<sup>(18)</sup>が唯一である。

これによると、昭和 9 年（1934）に田辺寺門前の畑から風鐸や瓦が出土したことから、沼隈郡教育会国史委員会が昭和 9 年 8 月と昭和 10 年 6 月に発掘調査を行い、その結果「九輪の破片・風鐸・古がわらが多量に出土」したとある。さらに「門前西方一帯に古かわらの散布を見、さらに東方にかけて、おびただし布目かわらが地表面下にもれている」状況が確認されたが、遺構は確認されていない。なお、中心礎石 1 点が石垣の石材として使用されていることが確認され、後に境内へ移設された。塔跡推定地は、昭和 18 年（1943）に「田辺寺塔跡」として広島県史跡に指定され、昭和 29 年（1954）には、出土遺物のうち風鐸破片 3 点、九輪破片 3 点、中心礎石 1 点が広島県重要文化財に指定された。なお、村上氏の報告によれば、出土した遺物は、発掘調査後は田辺寺と（福山市立）松永小学校に分けて保管されていたということであるが、次に見るように藤江尋常高等小学校に保管されていたものもある。

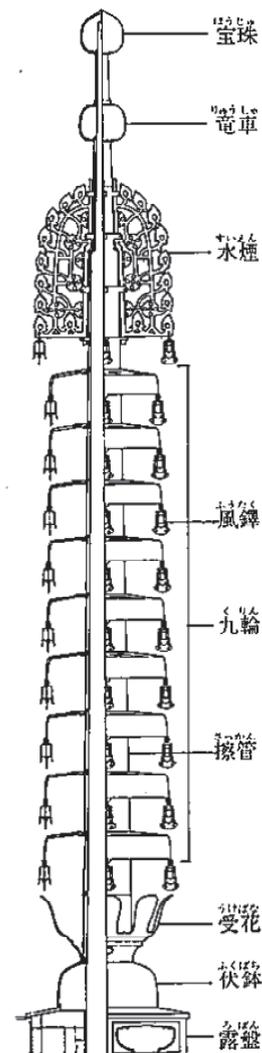
ところで、今回報告するのは、廃和光寺塔址出土遺物として伝来している金属製品破片 17 点（県重文の風鐸破片 3 点、九輪破片 3 点を含む）と、瓦 8 点であるが、これらが一括して出土し現在に伝わったものかどうかは明らかでない。第 1 表は、これらの遺物に注記された文字・記号や、貼り付けられているラベルに記載されている内容をまとめたものである。このうち、藤江尋常高等小学校のラベルが貼ってあるものは、昭和 9 年に出土したもので間違いのないと思われるが、「71 和光寺 田辺寺」と記載されているラベル自体は戦後のものと思われ、「71」は 1971 年を指すのかもしれない。例えばこの年に表採される等したものが途中で追加された可能性もある。

## 3 出土遺物について

### (1) 金属製品

層塔の屋頂にある飾りを相輪といい、下から露盤・伏鉢・受花、そしてその上に続く九つの輪（八つの場合もある。）を九輪という<sup>(19)</sup>。1～4 は、その九輪の破片と考えられる。

1～3 は県重文で、いずれも高さ 12.3 cm であるが、復元径はそれぞれ下端部の外径が 79.0 cm, 81.0 cm, 75.8 cm と、微妙に異なる。ただ、これらは土圧等により生じた歪みによる差と考えられ、



第 3 図 相輪各部の名称  
(注 19 文献より)

ここでは1～3は同一個体と判断したい。過去には、このうち2個体が接合するとして報告もあるが、接合はしない。1には、頂上の宝珠まで伸びる円筒状の擦管に向かって水平方向に伸びる輻の部分（幅4.5cm、厚さ1.4cm）が残っている。3には1か所孔があり、風鐸を吊るしていた可能性がある。

4については小片で、径・高さとも不明である。厚さが1～3と同じで同一個体の可能性もあるが、輻が折れた痕跡が残っており、その幅が3.5cmと1に比べて幅狭のため、1～3よりも上位の九輪の可能性もある。

1～4とも、外面は磨かれ内面は鋳放しのまま未調整で、端部には鋳造の際に鋳型からはみ出たバリを削り落とした痕跡が見られる部分がある。また、全体的に黒褐色の粉状の錆が付着している。材質については、これまで銅製、あるいは青銅製と紹介されているが、化学分析は行われていないので、詳しくは不明である。

5・6は円弧状、7～9は直線状に伸びる断面台形の金属製品である。互いに接合はしない。形状からいずれも九輪の一部で、5・6は擦管に接する円形の轂<sup>こしき</sup>、7～9は輻と考えられる。幅は5・6が3.2～3.5cm、7～9は3.8～4.0cmで、厚さはいずれも1.4cmである。5・6は外側の直径33.4cm、内側の直径が27.4cmを測る。10は端部を平坦にしていることと、外面は磨き内面は未調整であることが1～4と似ており、九輪の一部の可能性はある。ただ、厚さは1～4に比べて0.5cmと薄く、九輪であるならば上層のものであろう。5～10はいずれも褐色で、粉状の錆が全面を覆っている。

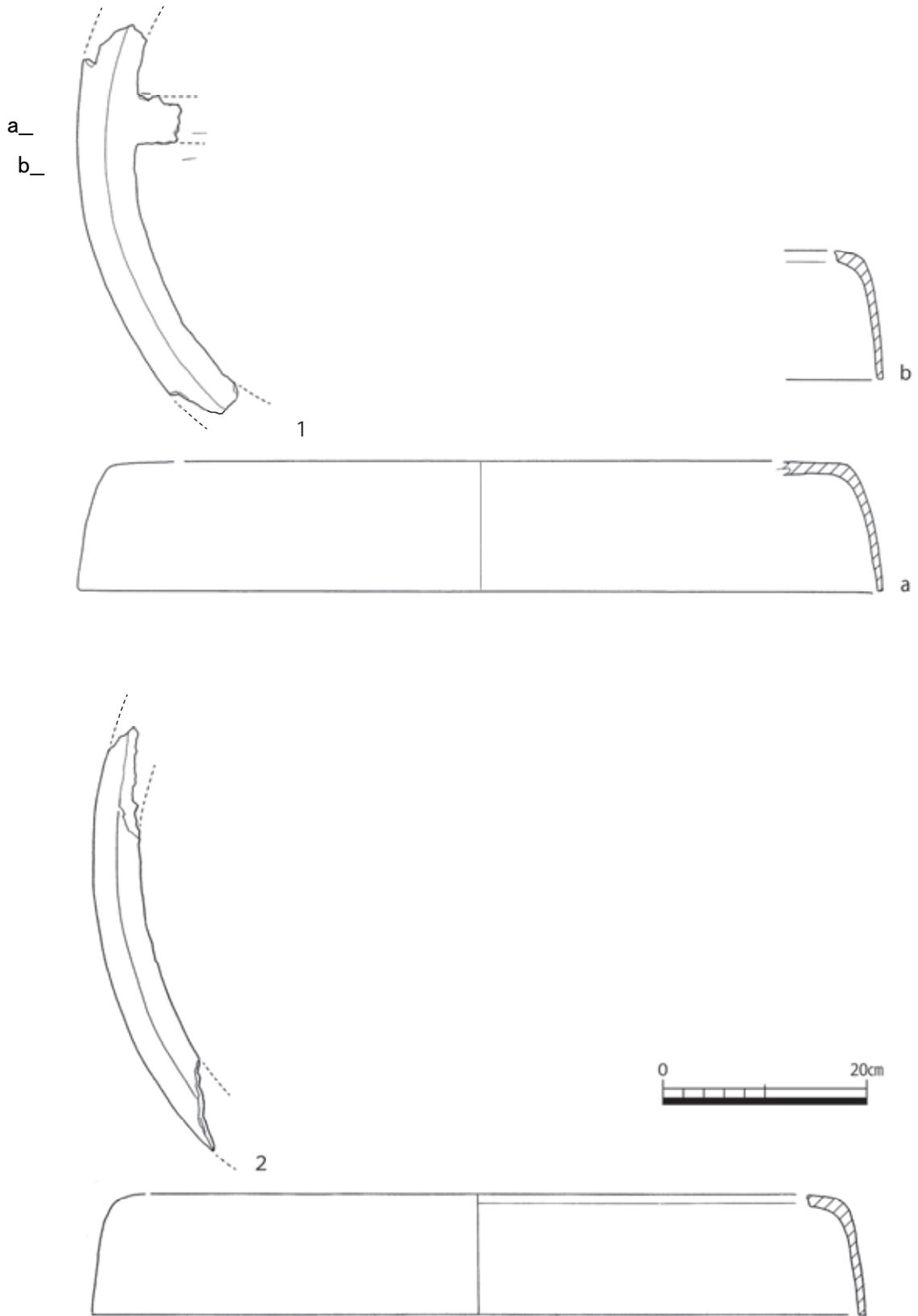
11～13は風鐸で、いずれも県重文である。11は現存高14.6cmで、全体的に褐色の錆で厚く覆われている。鐸の上端は長径6.0cm、短径5.5cm、最も裾に近いところでは長径7.5cm、短径6.3cmを測る。鈕は高さ3.0cm、舞と接する部分の幅は3.5cmである。孔は全体的に厚く錆が覆っているためふさがっているが、径1.5cm程度になると考えられる。鐸身には径0.9cmの孔があり、鐸身の両側面には幅0.2～0.3cmの断面方形の鱗部が付く。内面上部には、錆が厚く付着しているためか、風招等を吊り下げるための吊手の痕跡は認められない。12は鈕の部分のみが残るもので、鐸の上端は長径5.3cm、短径5.0cm、鈕の長さ2.5cm、鐸と接する部分の幅は3.8cmで、いずれの数値も11よりは一回り小さい。鈕には径約0.7cmの太い金属製の環が通されているが、錆着していて動かさない。内面天井部にある吊手は鈕と同じ方向に孔が開けられている。この孔には径0.3cmの輪が通された状態で残っており、錆着しておらず動かせる状態にある。輪は棒状のものを曲げたもので、端部は閉じておらず0.2cm程度間があいている。なお、11・12はいずれも褐色を呈しているが、12の内面に付けられた輪だけ青緑色の錆（いわゆる緑青）が付着している。

13は鐸身部分だけが残る。全体的に黒みがかった青緑色で、11・12とは素材が異なると考えられる。現存高は19.5cm、現存幅4.4cmで、幅を復元すると鐸上位で6.5cm、鐸裾部9.0cmとなる。鐸の裾部は端部が生きており、大きく半円にえぐれたような形状となる。鈕や内面の天井部の状況は不明である。

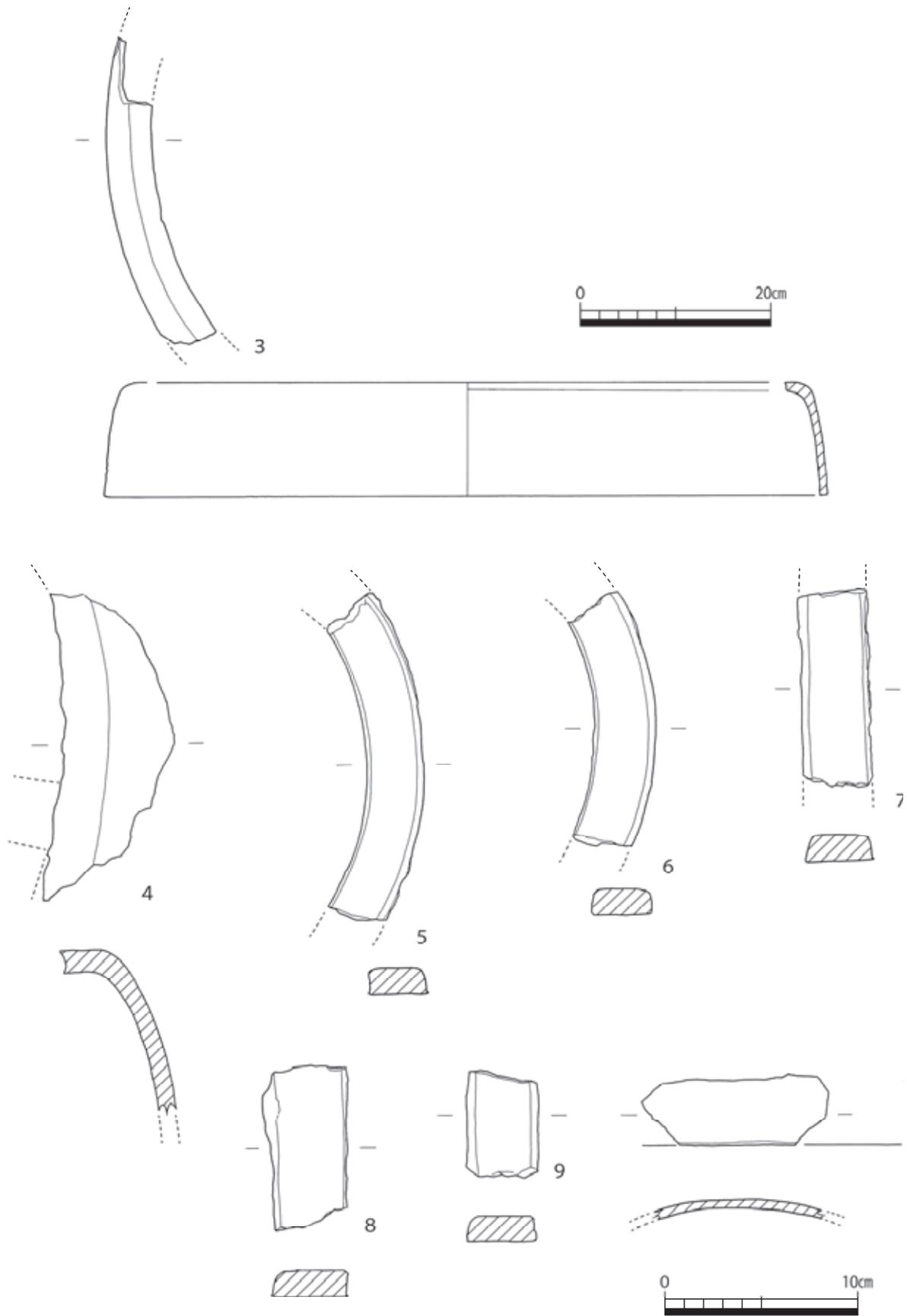
14～17は、いずれも厚さ0.3～0.4cmの金属板で14・17は緩やかに、16・17は大きく湾曲している。いずれも外面は研磨され内面は未調整であり、褐色で粉状の錆が全体的に付着している。16・17は断面円形であったと考えられるが、土圧のためかゆがみがあり径は復元できない。ただ、形状から擦管の一部である可能性がある。

## （2）瓦

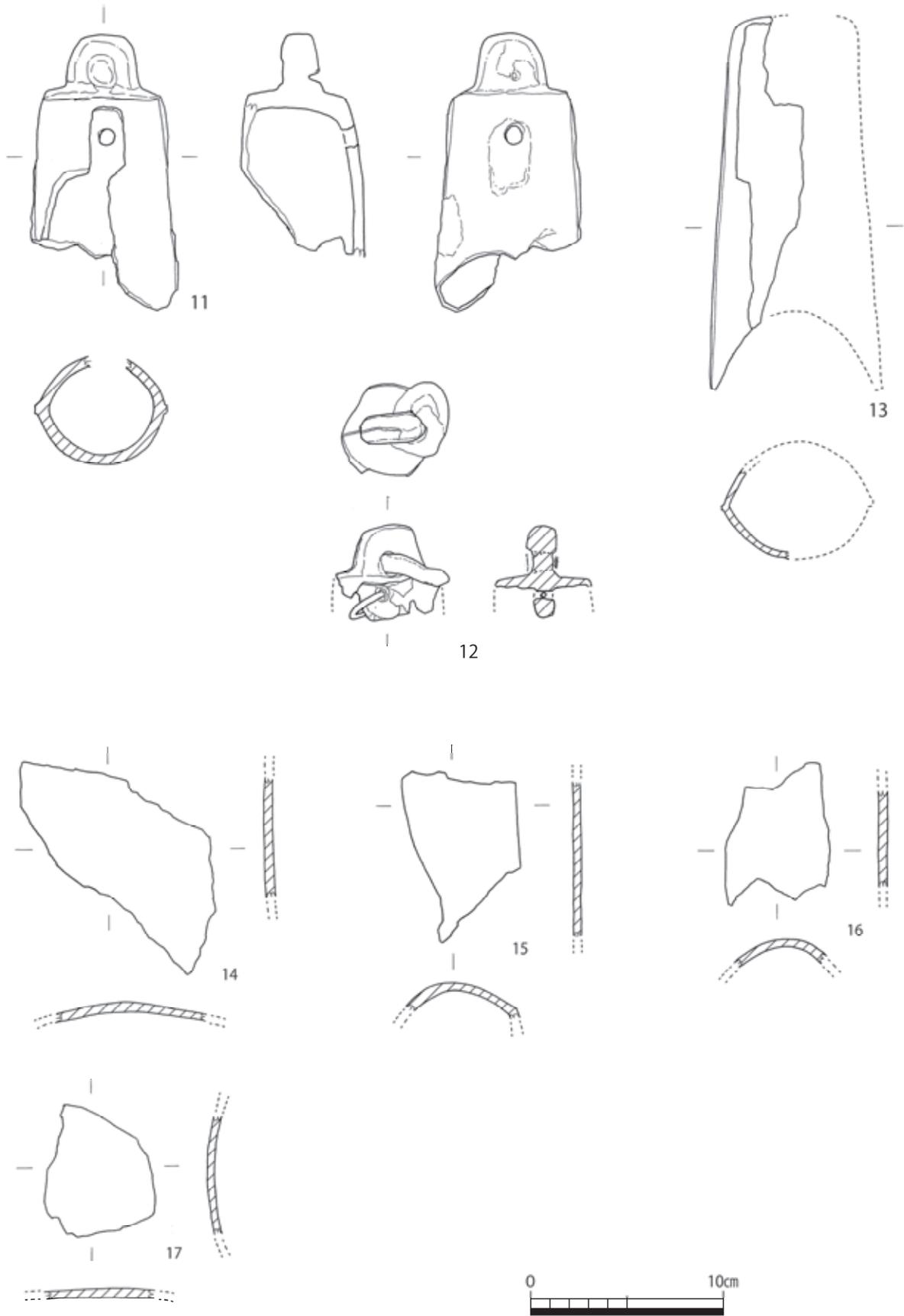
18は軒丸瓦で、最大幅19.9cm、最大長11.1cm、瓦当面の現存長9.4cm、19の軒丸瓦は最大幅13.3cm、最大長10.7cm、瓦当面の現存長14.6cmである。いずれも同様の瓦当文で同じ調整が施されている。凸面は



第 4 図 廃和光寺塔址出土遺物 金属製品実測図 1 (S= 1 : 6)



第5図 廃和光寺塔址出土遺物 金属製品実測図2（3はS=1：6，それ以外はS=1：3）



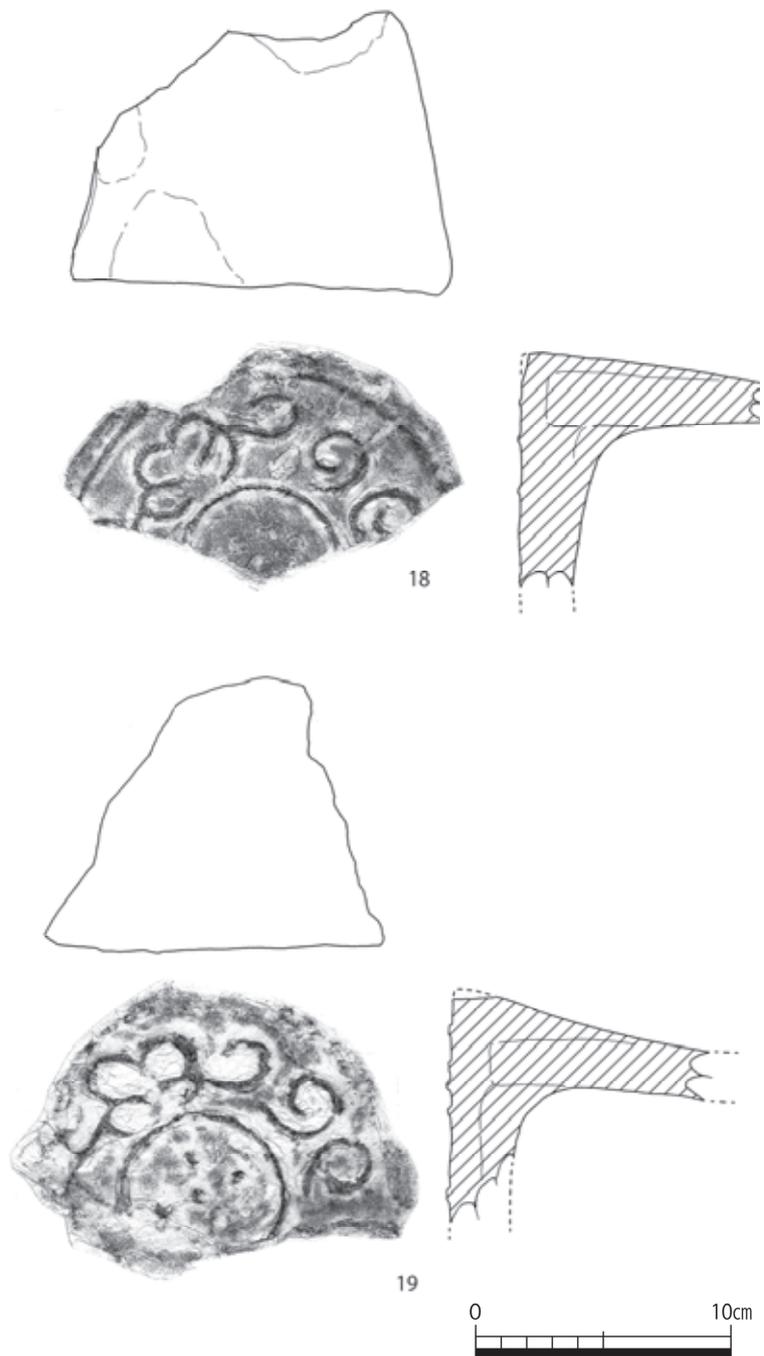
第 6 図 廃和光寺塔址出土遺物 金属製品実測図 3 (S= 1 : 3)

縦位のナデ、凹面は丸瓦部に目の細かな布目痕が残る。瓦当面の文様は唐草文で、対向するC字の上部が接してハート形になる部分と、逆にC字が背面对向する部分が組み合わさっており、独特の文様となっている。界線内は珠文が1+4である。瓦当部と丸瓦部の接合は、瓦当部の裏側に平瓦部を立てて、その周囲を粘土で補強している。

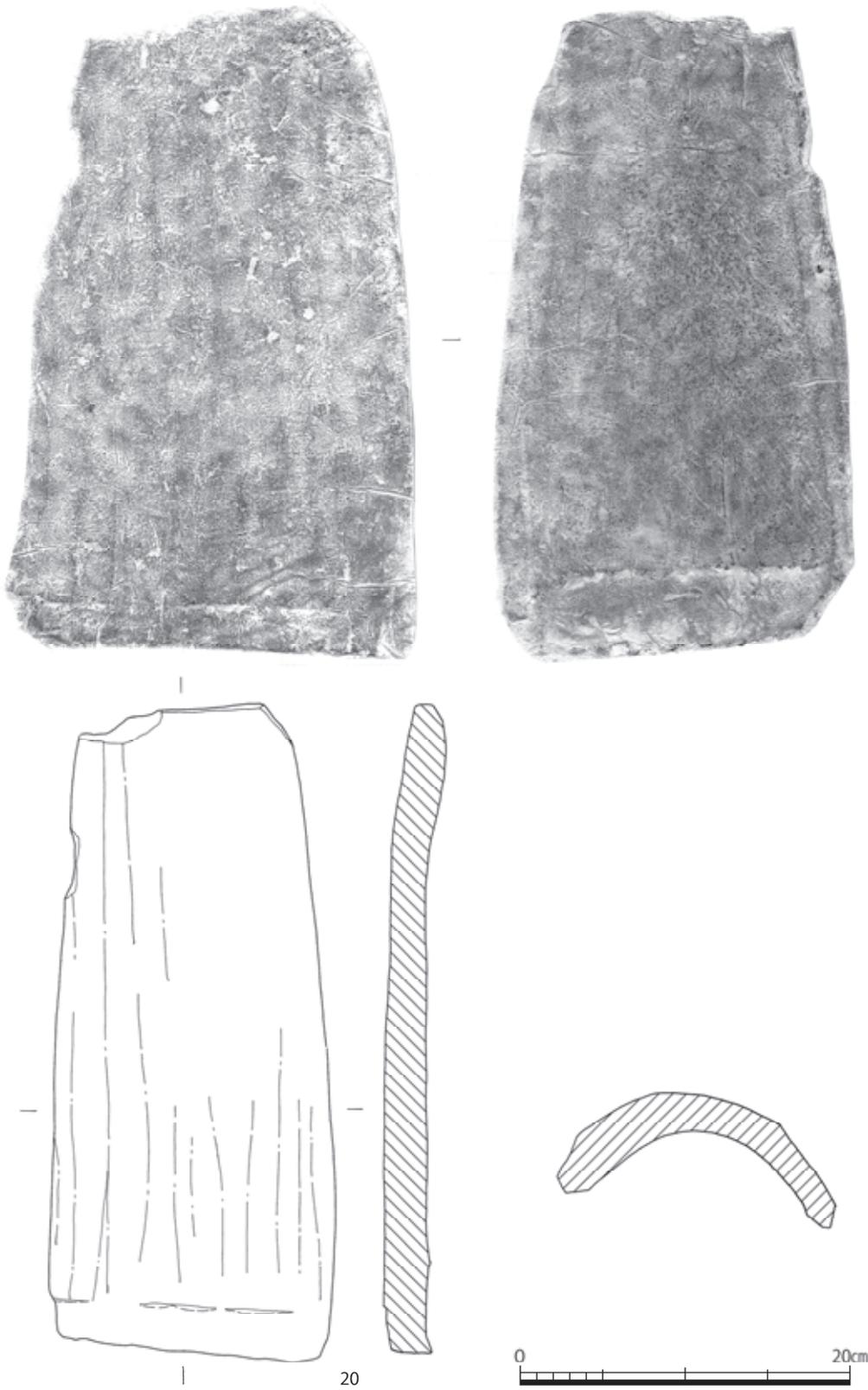
20は最大幅17.5cm、最大長41.5cmで、丸瓦のような形状であるが、瓦当部が外れた痕跡があり、軒丸瓦と考えられる。全体的に焼きが甘く、凸面は摩滅のため調整は不明瞭だが、縦位の削りが施されている。凹面もまた付着物が多いため調整痕は不明瞭だが、糸切りの痕跡がわずかに認められる。瓦当面側の端部は両側面と直行しておらず、やや斜めになっている。また、凸部には瓦当面側から2~3cmの位置に、瓦当面と平行する線状の窪みがあり、枷型の痕跡と思われる。

21は軒平瓦で、最大幅29.0cm、最大長30.2cm、瓦当面の厚さ5.0cm、平瓦部の厚さ2.7~3.0cmで、凹面には目の細かな布目痕が残る。瓦当面との境は横位に深くヘラ削りし面取りをしている。凸面は、平瓦部に縦位の縄目があり、その上から縦位のナデを施して縄目を消している。顎部は曲線顎で、粘土を付け足して縦横にナデ付けている。瓦当面は偏行唐草文である。文様の盛り上がりはおよそ2mmと厚く丸みがある。界線は幅3~5mmで、凹面側は一部が面取りにより大きく削り取られている。

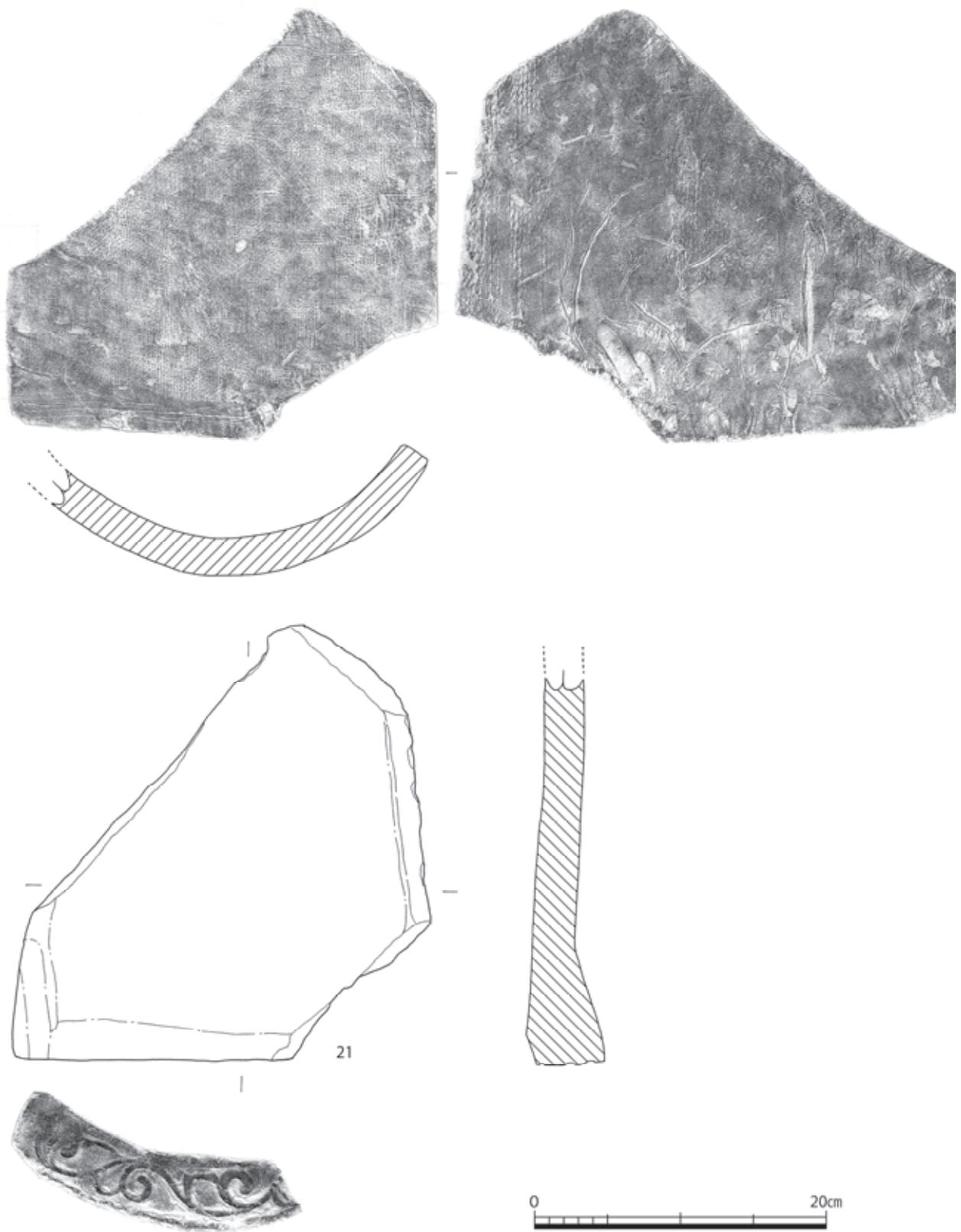
23は軒平瓦で、最大幅21.5cm、最大長23.4cm、瓦当面の厚さ5.0cm、平瓦部の厚さ2.5~3.0cmで、23の軒平瓦と接合する。22は、最大幅14.0cm、最大長16.6cmである。凹・凸面とも、21と同様の調整であ



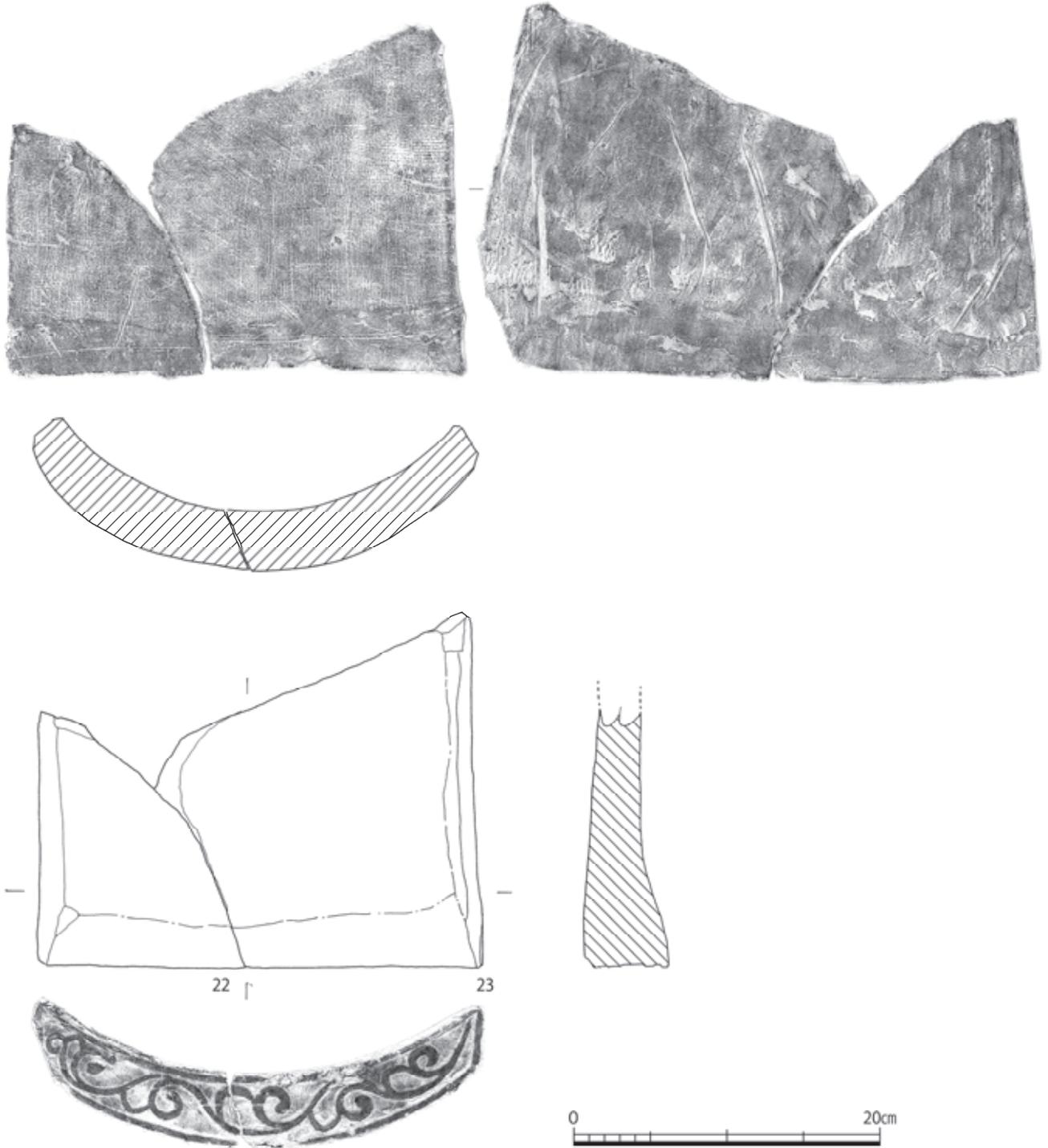
第7図 廃和光寺塔址出土遺物 軒丸瓦実測図1 (S=1:3)



第 8 図 廃和光寺塔址出土遺物 軒丸瓦実測図 2 (S= 1 : 4)



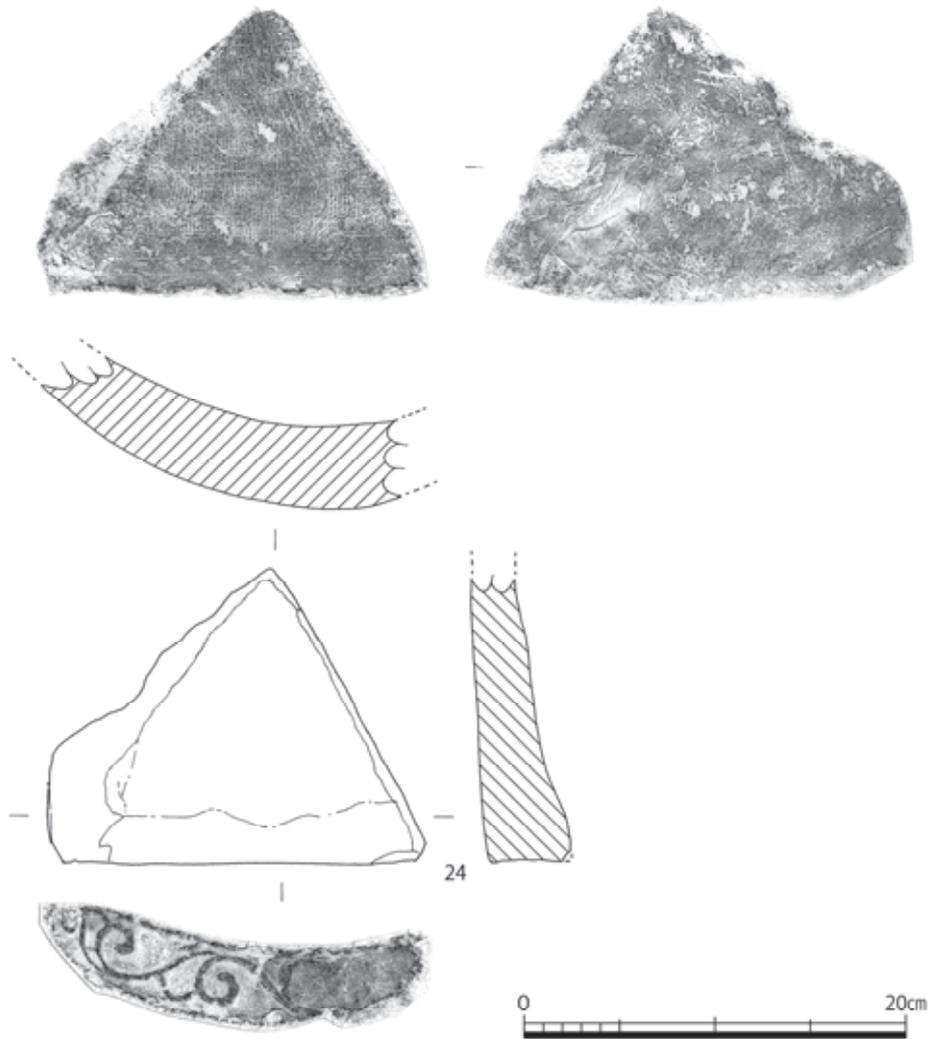
第9図 廃和光寺塔址出土遺物 軒丸平実測図1 (S=1:4)



第 10 図 廃和光寺塔址出土遺物 軒丸平実測図 2 (S= 1 : 4)

る。瓦当面の偏行唐草文は、21 に比べて盛り上がりは1mm以下と薄い。凸面側には、瓦当面から11.5cmの位置に、瓦当面と平行する方向に幅5mm程度の朱線が残っており、軒の位置を示すものと考えられる。

24 は軒平瓦で最大幅19.7cm, 最大厚15.5cm, 瓦当部の厚さ4.3cm, 平瓦部の厚さは2.4~3.3cmである。凹・凸面とも、21~23の軒平瓦と同様の調整である。瓦当面の偏行唐草文は文様の盛り上がりはおよそ2mmと厚く丸みがある部分と、ほとんど盛り上がりのない部分がある。25 は軒平瓦で、最大幅26.5cm, 最大長43.2cm, 瓦当面の厚さ4.0cm, 平瓦部の厚さ2.5~4.0cmである。凹面は、目の粗い布目痕がわずかに見られるが、顕著な調整痕は認められず、全体的にナデが施されていると見られる。凸面は粗い縄目の叩き痕が顕著で、瓦当面近くは不定方向のナデが施されている。顎部は直線顎で、瓦当面の均整唐草文である。文様・界線とも幅およそ3mmで、21~24に比べると線が細い。線の盛り上がりはおよそ1mmである。



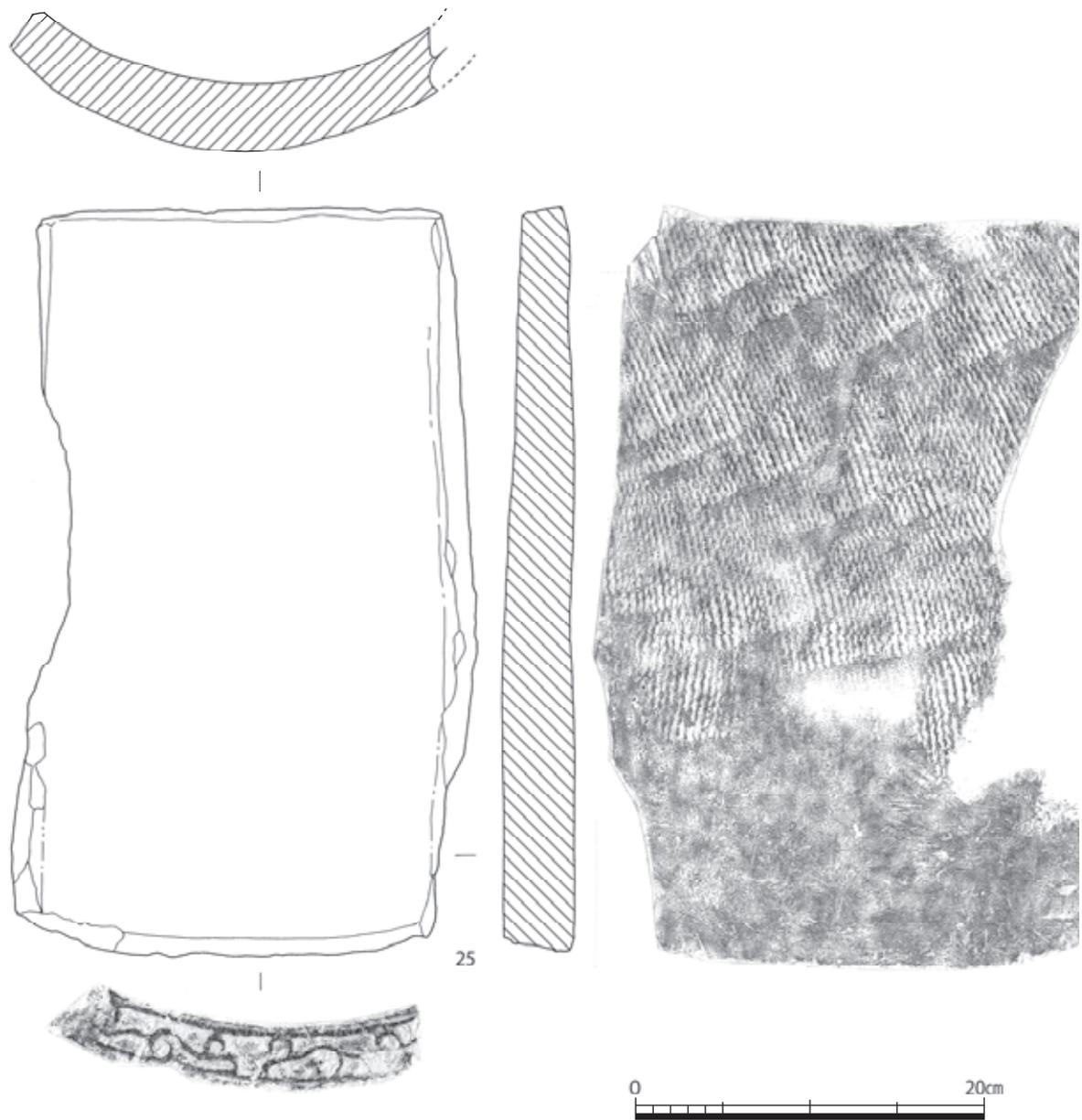
第11図 廃和光寺塔址出土遺物 軒丸平実測図3 (S=1:4)

#### 4 まとめ

##### (1) 出土遺物について

今回、検討した遺物のうち、時期の推定が可能なのは瓦である。このうち、18・19 の軒丸瓦と 21～24 の軒平瓦は、いずれも胎土は比較的精緻で青みがかった暗灰色で共通すること、また軒丸瓦の凹面に残る布目痕が、軒平瓦の凹面の布目痕と同じであることから、セットになると考えられる。

時期については、奈良県薬師寺宝積院の発掘調査で出土した曲線顎の瓦が 11 世紀末から 12 世紀に比定されていること<sup>(20)</sup>、軒丸瓦のモチーフに唐草文が用いられるようになるのが平安時代後期頃であることを踏まえて、ここでは 12 世紀頃としておきたい。その場合、これらの瓦は創建瓦ではなく、補充瓦として位置付けられよう。



第 12 図 廃和光寺塔址出土遺物 軒丸平実測図 4 (S= 1 : 4)

広島県内では、平安時代の瓦生産の実態は明らかではないが、福山市坪生町の坪生滑池窯跡群や、熊野町の草田窯跡群から出土している瓦を見る限りではあるが、18・19の軒丸瓦と21～24の軒平瓦は在地産のものではなく、他国で生産され持ち込まれたものと考えられる。軒丸瓦と同じ瓦当文様を持つ瓦は、管見の限りでは確認されていないが、瓦の産地が今後明らかになれば更なる検討が行えるものと期待される。

一方、九輪や風鐸等の金属製品については、県内では類例はない。他県の例を見ると、風鐸については、兵庫県伊丹廃寺跡<sup>(21)</sup>や島根県山代郷北新造院跡<sup>(22)</sup>、奈良県飛鳥寺旧境内地<sup>(23)</sup>等から出土しているが、いずれも7～8世紀に位置付けられており、廃和光寺塔址出土遺物との比較が難しい。金属製の九輪については、前述の伊丹廃寺跡や岡山県関戸廃寺<sup>(24)</sup>から出土しており、九輪の径や輻、轂の厚さや幅などは廃和光寺のものと比較的似てはいるが、現時点では規模や形状だけで遺物の相異を論じることはできず、遺物から見た廃和光寺塔址の検討は今後の課題である。

## （2）廃和光寺の建立とその後の動向に係る背景について

廃和光寺は、8世紀に建立された伝承を有し、少なくとも12世紀には何らかの瓦葺建物があった可能性が確認できた。これを踏まえて、建立の背景についてみてみたい。

廃和光寺の背後（北西）の丘陵上には、弥生時代以降多くの集落が営まれ、また古墳時代にも数多くの古墳が築かれており、人口が集中していた地域であることがうかがえる。おそらくは、平野部に広がっていたであろう耕作地や、芦田川の河口に位置し交通の結節地点であったこと等が背景にあったものであろう。また、7世紀中葉以降の終末期古墳も確認されており、沢田第1号古墳の斜面下で出土した陶棺や陶硯等から考えると、備中地域とつながりを有する官人層がいた地域と考えられ、平野部には何らかの官衙施設があったものと推定される。

この地域に官衙施設があったと推定される根拠は、10世紀の遺物からもうかがえる。「2 位置と環境」で触れたサブ遺跡や、草戸千軒町遺跡<sup>(25)</sup>からは、緑釉陶器が出土しており、備後南部では府中市の備後国府跡に次いで多い。

福山市津之郷町は、『倭名類聚抄』（承平年間（931～938年）編纂）の沼隈郡の4郷のうちの「津宇」郷に充てられる。この郷名については、『続日本紀』和銅6年（713）5月2日条の「制、畿内七道諸国郡郷名着好字」や『延喜式』民部省の「凡諸国部内郡里等名、並用二字、必取嘉名」から2文字と表記されるようになったと推測されており、本来は「津」郷であったと考えられている<sup>(26)</sup>。

このような、人口が多く、津すなわち港があり、そして官衙施設があったこの地域に、寺院が建立されたと考えられる。

そして、瓦からうかがえる12世紀代のこの地域についても、どのような状況であったか概観しておきたい。

この時期、この地域を示す語としては、嘉元4年（1306）の昭慶門院所領目録に興善院領の一つとして「津本郷」の名が見える<sup>(27)</sup>。津本郷を領していた興善院は、鳥羽上皇と深い関わりを持つ民部卿藤原顕頼が建立した安楽寿院末寺であり、安楽寿院は鳥羽院の御願寺として建立された寺院である。藤原顕頼は、母が鳥羽院の乳母であることもあり、長年にわたって院別当を務めた典型的な院の近臣として知られる<sup>(28)</sup>。備後国は12世紀になると、白河院や鳥羽院に仕える近臣らが国守等を務めることが多く、院とつながりの深い状況にあった。例えば、天永3年（1112）から少なくとも元永2年（1119）までは白河上皇の分国であり、また大治2年（1127）から長承3年（1134）には藤原時通（顕頼の弟で美福門院の兄）、仁平2年（1152）から久寿2年（1155）等には藤原家明（鳥羽院寵臣の藤原家成の子）が、備後国の国守として名が見える<sup>(29)</sup>。

津本郷の立荘の経緯は不明だが、備後国に勢力を有する院の近臣らによって、御願寺に施入された荘園であったことについては、この地域の歴史を考える上で留意しておきたい点である。

この地域の 12 世紀の歴史を示す資料は少なく、現状では踏み込んだ検討は難しいが、例えば 10 世紀後半から 11 世紀前半に比定されている田辺寺所蔵の木造毘沙門天立像<sup>(30)</sup>や、田辺寺の南約 2.4 km の福山市瀬戸町に長く安置されていた 12 世紀後半の年代が与えられている木造阿弥陀如来坐像<sup>(31)</sup>（いずれも広島県重要文化財）等、この地域の歴史を示す資料の再検討が進んでおり、本稿で取り上げた考古資料も含めて、今後更なる検討が期待される。

### 【注】

- 1 本遺跡の名称については、広島県遺跡地図では「和光廃寺跡」と「県史跡 田辺寺塔跡」の 2 か所の埋蔵文化財包蔵地として扱われており、いずれも古代の寺院跡とされている。本稿では広島県重要文化財の指定名称中の遺跡名に従い、遺跡を「廃和光寺」、寺跡内の塔跡推定地周辺から出土したとされる遺物を「廃和光寺塔址出土遺物」と表記した。また、それ以外の遺跡名については、広島県遺跡地図や発掘調査報告書等に拠った。
- 2 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (VI)』平成 3 年 (1991)
- 3 註 2 と同じ。
- 4 福山市教育委員会『本谷遺跡発掘調査概報』昭和 48 年 (1973)
- 5 公益財団法人広島県教育事業団『湯伝遺跡 山手赤坂線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』平成 30 年 (2018)  
福山市教育委員会『湯伝遺跡第 2 次調査報告書 一都市計画道路山手赤坂線街路改良事業に係る記録保存のための発掘調査一』平成 30 年 (2018)
- 6 註 2 と同じ。
- 7 村上正名「貨泉出土の古代遺跡」『吉備考古 第八十八, 九合併号』吉備考古学会 昭和 29 年
- 8 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (VII)』平成 3 年 (1991)
- 9 註 8 と同じ
- 10 註 2 と同じ。
- 11 もう 1 例は、竹原市新庄町で出土している。  
田邊英男「竹原市毘沙門岩下採集の陶棺」『芸備古墳文化論考』芸備友の会 昭和 60 年 (1985)
- 12 広島県教育委員会『山陽新幹線建設地内発掘調査報告』昭和 48 年 (1973)  
鈴木康之「備後における古代末期の土器の一樣相 一福山市ザブ遺跡出土資料をめぐって一」『考古論集 一潮見浩先生退官記念論文集一』平成 5 年 (1993)
- 13 福山市史編纂会『福山市史 上巻』昭和 38 年 (1963)  
松下正司「備後南部地域の発掘遺跡からみた備後国府」『備後国府関連遺跡 I』第二分冊 平成 18 年 (2016)
- 14 妹尾周三「六 広島古瓦」『考古学から見た地域文化 一瀬戸内の歴史復元一』溪水社 平成 11 年 (1999)
- 15 妹尾周三「備後南部地域の「藤原宮式」軒瓦について」『文化財論究 第 1 集』財団法人東広島市教育文化振興事業団文化財センター 平成 10 年 (1998)
- 16 (1) 山崎信二『古代瓦と横穴式石室の研究』平成 15 年 (2003)  
(2) 吹田市立博物館『瓦 一平安の都へ一』平成 6 年 (1994)
- 17 備後南部の平安時代瓦窯跡については、次の資料を参考にした。

- 篠原芳秀「つぼう郷土史研究会 第37回総会・講演会資料 坪生の窯跡資料の再確認」平成31年（2019）
- 18 村上正名「廃和光寺塔址出土遺物」『広島県文化財調査報告 第二集』広島県教育委員会 昭和37年（1962）  
同様の内容は『福山市史』にも掲載されている。
- 19 各部の名称については、次の文献に従った。  
浜島正士編『日本の美術7 No.158 塔の建築』至文堂 昭和54年（1979）
- 20 山崎信二「瓦埴類 一葉師寺宝積院の調査」『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』平成4年（1992）  
註16(1)文献と同じ。
- 21 伊丹市教育委員会『伊丹廃寺跡』昭和41年（1966）
- 22 島根県教育庁『史跡山代郷北新造院跡』平成19年（2007）
- 23 石橋茂登「飛鳥地域の風鐸 一第197-2次，大官大寺第3・5次」『奈良文化財研究所紀要 2020』独立行政法人  
国立文化財機構奈良文化財研究所 令和2年（2020）
- 24 笠岡市教育委員会『関戸廃寺』平成9年（1997）
- 25 草戸千軒町遺跡からは主に遺構外から出土している。  
広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡発掘調査報告I』平成5年（1993）
- 26 広島県『広島県史 原始 古代』昭和55年（1980）
- 27 広島県『広島県史 中世』昭和59年（1984）
- 28 五味文彦『院政期社会の研究』昭和59年（1984）
- 29 備後国の国司らの動向は、註26文献の「付録1 備後・安芸両国国司表」，及び註28文献を参考にした。
- 30 濱田恒志「広島・田邊寺の毘沙門天立像について—古代の津と仏像—」『古代文化研究 No.26』島根県古代文化セ  
ンター 平成30年（2018）
- 31 光谷拓実・白井比佐雄「木造阿弥陀如来坐像の年輪年代測定」『広島県立歴史博物館研究紀要 第18号』広島県立  
歴史博物館 平成28年（2016）  
木造阿弥陀如来坐像が安置されていた福山市瀬戸町は、津本郷の南に隣接していたと見られる長和荘内にあり、こ  
の荘園もまたこの興善院領の一つとして史料に残っている。



九輪 (遺物番号 1~3)



九輪カ (遺物番号 5~10)



風鐸 (遺物番号 11~13)



金属製品 (遺物番号 4・14~17)



軒丸瓦 (遺物番号 18・19)



軒丸瓦 (遺物番号 20)



軒丸瓦 (遺物番号 20)



軒平瓦 (遺物番号 21)



軒平瓦 (遺物番号 22・23)



軒平瓦 (遺物番号 24)



軒平瓦 (遺物番号 25)



軒平瓦 (遺物番号 25)

執 筆 者

石川 良枝	広島県立文書館文書等整理従事員
石橋健太郎	広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
伊藤 大輔	広島県教育委員会事務局管理部文化財課主任
岡野 将士	広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
木村 信幸	広島県立歴史博物館学芸課長兼草戸千軒町遺跡研究所長
久下 実	広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
花本 哲志	広島県立歴史博物館頼山陽史跡資料館主任学芸員
湯谷 祐三	愛知県立大学非常勤講師
廣森美枝子	小牧市古文書調査会会員
尾崎 光伸	広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所主任学芸員

広 島 県 立 歴 史 博 物 館 研 究 紀 要 第 24 号

BULLETIN of the HIROSHIMA PREFECTURAL MUSEUM of HISTORY Vol.24

発 行 日 令和 3 年 9 月 30 日

編集・発行 広島県立歴史博物館

Hiroshima Prefectural Museum of History

〒720-0067 広島県福山市西町 2-4-1

2-4-1 Nishi-machi Fukuyama City Hiroshima Prefecture

720-0067,Japan

Tel.084-931-2513 Fax.084-931-2514

印 刷 株式会社カオス

